

Title	イギリスにおける社会民主主義の形成過程（その一）：ヴィクトリア中期資本主義の相対的安定期における社会民主主義の性格形成について
Sub Title	A study on the character of social democracy (1) : on the formative process of social democracy in the mid-Victorian era
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.7 (1959. 7) ,p.585(17)- 602(34)
JaLC DOI	10.14991/001.19590701-0017
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590701-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ある。その第一着歩として直ちに当面の敵である私有財産制そのものに攻撃の鋒を向けることは策のえたものではなく、これを当該社会の秩序、平和、安寧の基礎としてしばらく是認し、それに対して慎重な敬意を払いながら、まず、私有財産制の生んだ二大悪徳である貪欲と野心との撲滅を計ることによって間接に私有財産の根底を覆えすことにある。この迂回的戦法こそ私有財産を最も有効的に確に打倒する方法である。立法家はこのような社会変革上の秘訣を忘れてはならない。それ故に立法家の直次の責務は私有財産のもたらした二大悪徳である貪欲と野心との撲滅にある。これができなければ、たとい、他にいかに法律に法律を重ねても畢竟徒勞であろう。そしてここにこそ立法の要諦は存する。このようにマブリーは説くのである。

(1) Mably; Oeuvres, T. IX. p. 113.

(2) Mably; Oeuvres, T. IX. p. 113.

これまで概観したところから明らかなようにモレリーの社会主義

とマブリーのそれとは、その構成においては種々異なっているが、彼らがいずれも当時の流行思想であった利己主義道徳説から出発して、しかも何らの経済学的分析をもちうることなく、共産社会の理念に到達したという点において全くその軌を一にするものである。そして、このことはまた啓蒙期社会主義に一般に共通するところの性格である。すなわち彼らは(あたかもマルクスが社会主義を経済学的に基礎付けようとしたように)社会主義を道徳学的に基礎付けようとしたのである。

マルクシズム以前の社会主義は一樣に「空想的」の形容詞を冠せられてとかく低く評価されている。無論それは理由のないことではない。しかしマルクシズムの盛名に隠されて、空想的社会主義が、思想上、とかく正当の評価に恵まれず、その短所と共にその長所までが、不当にも埋没されている。マルクスに遙に先んじて、自然科学の方法をもって自然秩序——社会主義——を探索した啓蒙期社会主義者の数々の努力は高く評価されるべきものと思う。

イギリスにおける社会民主主義の形成過程(その一)

——ヴィクトリア中期—資本主義の相対的安定期—
における社会民主主義の性格形成について——

飯 田 鼎

一、問題の提起——社会民主主義の概念規定——一八四八年の革命を中心として——

二、イギリス社会民主主義の構造

三、イギリス社会民主主義の特殊性

イギリスにおける社会民主主義の生成過程を論ずるにあたり、われわれは、もっとも基本的な問題ともいふべき社会民主主義一般について、その概念を明らかにしておかなければならない。あらゆる概念がそうであるように、社会民主主義 (Social-democracy, Sozialdemokratie) という言葉も、歴史的に規定せられ、それが意味する内容も、時代によって異ならざるをえない。もっとも具体的にのべるならば、社会民主主義そのものの性格は、一九世紀後半

イギリスにおける社会民主主義の形成過程

から二〇世紀の今日まで、資本主義社会の変転にともなっていていちじろしい変貌をとげてきたという事実である。現在では、普通に社会民主主義といえは、「議會主義による社会主義の実現」いわゆる「民主社会主義」(Democratic Socialism) などとも呼ばれるように、マルクス主義を徹底的に排斥することによって、もっぱら平和的説得的な手段によって社会主義を実現することを信条としている政党のイデオロギーと考えられる傾向が見られることである。第二次大戦後のドイツ社会民主主義党やイギリス労働党がそれであり、わが国の社会党の如きもこれに近い態度をとりつつある。しかし社会民主主義という言葉は、今日でこそ日和見的妥協的な響きをもってはいるが、資本主義の爛熟期ともいふべき十九世紀後半から、一九一四年の第一次世界大戦の勃発に至るまでは必ずしもそうではなかった。事実、マルクス主義に立脚する各国の社会主義政党は、ドイツ

社会民主党や、ロシア社会民主主義労働者党をはじめ、ほとんどが「社会民主」なる呼称を用い、社会民主主義はそのままマルクス主義と同じ意味に用いられていた。プロレタリアートを中核とする社会主義政党が、ことさらに「社会民主党」と称せられるに至ったのは、それが成立した当時における階級関係の反映の結果であり、われわれは、社会民主主義の一般的概念に到達するために、社会主義政党が、もっとも早い時期にあらわれたドイツの場合について考察してみよう。

一八四八年、記念すべきブルジョア革命の年に、世界の労働者階級によびかけられた共産党宣言は、その冒頭において、「一つの妖怪がヨーロッパをさまよっている。——共産主義の妖怪が。」という有名な文句をもってはじまっていることは、ひろく知られている。これはいかえるならば、ヨーロッパに共産主義運動が、たんにイデオロギーとしてだけでなく、社会変革という具体的な目標をかかげて登場しつつあったことを暗示している。そこで、共産主義運動の、当時における発展を、ヨーロッパ、とくにドイツおよびフランスについてみるとしよう。「共産主義者同盟は、そのころの事情のもとではいまでもなく、秘密組織となるほかなかった国際的な労働者組織」であった。共産主義者同盟はどのようにして成立したかといえは、これは、マルクスおよびエンゲルスの名と密接に結びつけられている。「マルクスのブリュッセル追放の三年間に、ベルギーの首府は共産主義運動の一種の中心となった。一八四五年春か

ようにのべられている。「共産主義革命は、けっしてたんに一国だけのものではなく、すべての文明国で、いかえると、すくなくともイギリス、アメリカ、フランス、ドイツで同時におこる革命となるだろう。この革命は、これらの国々で、どの国が他よりも発達した工業、大きな富、また大きな生産力をもつかにしたがって、あるいは急激に、あるいは緩慢に発達するだろう。」これは、今世紀に至って重大な論議の中心ともなった「世界革命論」の原型であった。これは、共産党宣言では、よりはっきりとした思想となつてあらわれている。すなわちつぎのようである。「共産主義者はおもにドイツにその注意をむける。それは、ドイツがブルジョア革命の前夜にあるからであり、しかもドイツは、一七世紀のイギリスや一八世紀のフランスにくらべて、一般により進歩したヨーロッパ文明の諸条件のもとで、またはるかに発展したプロレタリアートをもち、この変革をなしとげるため、ドイツのブルジョア革命は、プロレタリア革命の直接の序幕となるほかないからである。」(傍点筆者)。これによれば、ドイツにおいては、一八四八年の革命につづいて、間もなく社会主義革命がおこるはずであった。「一八四七年には、社会主義者といえは、つぎの二種類の人々をさしていた。一方では、いろいろな空想的学説の信奉者、とくにイギリスのオーエン主義者と、フランスのフーリエ主義者をさしていたが、この両者とも、もうその当時には、しだいに死滅していくたんなる宗派に萎縮してしまっていた。他方では、資本や利潤をすこしも傷つけずに、いろいろ

イギリスにおける社会民主主義の形成過程

ら、一八四六年夏まで、エンゲルスもまたブリュッセルに住んだ。ここから両人は、イギリスのチャーティズムおよびフランスの社会民主主義の革命的分子との活潑な結合を維持した。彼らはことに、『ノーザン・スター』の編集者ジュリアン・ハーニーおよび『改革』の編集者フェルディナンド・フロコンと文通した。国際的な組織としての共産主義者同盟や、アーネスト・ジョンズやハーニー等のチャーチスト指導者の精神的影響のもとにあったのが、同胞民主協会であって、これは国際的組織体であつて、そのなかに義人同盟(Das Bund der Gerechten)は、カール・シャッパイヤ(3)やヨーゼフ・モルその他の同盟員によって代表されていた。エンゲルスも指摘しているように、「ドイツに社会主義がおこつたのは、一八四八年(ドイツ革命)よりはるか以前のことである。それは、はじめのうちには二つの独立した流れをしめしていた。一方はフランスの労働者共産主義の流れをくんだ純粹の労働運動で、この運動から、その発展段階の一つとして、ワイトリングのユートピア的共産主義が生まれた。それから、他方は、ヘーゲル哲学の崩壊によってあらわれた理論的な運動で、この流れは実に、その最初からマルクスの名によつておおわれている。一八四八年一月の『共産党宣言』は、この二つの流れの合体をあらわすものであった。」

共産党宣言以前におけるドイツ社会主義運動の理論を、もっとも典型的にあらわすものとして、一八四七年一月に、エンゲルスによつて書かれた「共産主義の原理」があるが、このなかで、つぎのろな万能薬や各種のつきはぎ細工で、社会の弊害をとりのぞこうとしていた種々さまざまな社会的やぶ医者(4)をさしていた。どちらの場合にもそれは、労働運動の外部に立ち、むしろ『教養ある』階級に支持をもとめていた人々であつた。これに反して、たんなる政治的変革では不十分であることを確信して、社会の根本的な改造を要求していた労働者の一部分、この部分が当時はみずから共産主義者と名のついていた。それは、たんなるあらけずりの、たんなる本能的な、ときにはいくぶんか粗雑な共産主義ではあつたが、空想的共産主義の二つの体系、フランスでは、カペーの『イカリア』共産主義、ドイツではワイトリングの共産主義をうみ出すほどに有力であつた。エンゲルスのこの叙述には、一八四八年における社会主義が、いわゆる空想的社会主義として明確に把握され、共産主義こそ、社会の根本的改革を要求する革命的な労働者のイデオロギーである点(5)が、強調されている。すなわち、社会主義は空想的・ブルジョア的理論と共産主義は革命的・プロレタリア的理論との根本的相違が、もっとも明瞭な形で対比されているのである。ここでは、「社会民主主義」という概念は、まったくでこない。一八四八年以前のいわゆる共産主義者にとつては、社会主義革命を達成するための一つの手段として、議会制度の役割を正しく評価しようとするのちのマルクス主義者のような考え方は、まったく問題にならなかつたか(6)のようである。言葉をかえていへば、一八四八年以前には、資本主義は、共産主義者の革命的な蜂起によつて一挙に打倒しようといふ

思想が支配的であった。ところが、一八四八年の革命の結果は、このような考え方に終止符をうつ結果となったのである。

一八四八年二月、パリに勃発した革命によって、ルイ・フィリップは放逐され、フランス共和国が宣言されるや、これはただちにウィーンに波及し、三月、ウィーンの人民はメッテルニッヒを追放した。一方、ベルリンにおいては、人民は武器をとって、一八時間にわたる頑強な闘いのうちに、国王を屈服せしめた。その影響がヨーロッパ全土に及び、ポーランド、ロシアそしてイタリアにさえ及んだという事実は、この偉大なブルジョア革命の規模の大きさとその歴史的な意義の深さを示しているが、それにもかかわらず、この革命に、重大な役割を果たした労働者階級は、結果的にはほとんどどこでなくして終わった。ドイツにおいても絶対主義的封建的勢力と闘うべく、起ち上ったブルジョア階級は、その後プロレタリアートの勢力の増大をみるに及んで、王権との妥協への途をえらんだのである。労働者階級の政治権力への接近は、一片の白日夢と化し、それどころか、革命の直接的結果はブルジョア階級の権力掌握とその反動化、そして資本主義的生産の発展であった。かくして、一八四九年と一八五〇年に全盛に達した産業の繁栄が、ヨーロッパに新たに反動を蘇生せしめる原動力となったのである。この革命によって、労働者階級が学びとった深刻な教訓は、はげしい一撃をもってすれば、資本主義を打倒することができるという従来までの見解は、いわばひとつの空想となり、戦術的な意味で徹底的な修正をせ

まられたことである。エンゲルスは、マルクスの「フランスにおける階級闘争」に附した一八九五年の有名な序文のなかで、つぎのようにのべている。

「ところが、歴史はわれわれもまたあやまっていたことをおしえてくれ、当時のわれわれの考えをひとつの幻想としてばくろしてくれ。歴史は、もっとさきまで前進した。歴史はわれわれの当時の誤謬をぶちこわしたばかりでなく、プロレタリアートが闘争する場合の条件を、すっかり根底から変革してしまった。一八四八年の闘争方法は、こんにちでは、どの関係からも時代おくれとなつてゐるからである。」

またつぎのようにのべている。

「こんにちでは、やすみなく前進し、日々数と組織と規律と洞察とそして勝利の確信をたかめつつある社会主義の大国際軍がある。この強力なプロレタリアート軍さえも、いまだにその目標を達成していない。しかもいまだ、彼らが強力な一撃をもって勝利を獲得することは思いもよらず、苛酷執拗な闘争によって、一陣地より一陣地へと徐々に前進しなければならぬとすれば、それは、一八四八年に簡単な奇襲によって社会的変革に成功することがいかに不可能であったかを決定的に証明するものである。」(傍点筆者)。

エンゲルスはここで、一八四八年の革命を峠として、ヨーロッパにおこりつつあった重要な諸変化のうち、資本制生産の飛躍的な発

展および軍事科学の進歩にともなう戦術の変化に注目し、とくに階級闘争の激化する革命的状況のもとにおける市街戦の意義について、その戦術的優越性を否定したのち、結論的につきのようになっている。

「奇襲の時代、すなわち意識のない大衆の先頭に立った意識ある少数者が遂行した革命の時代はすぎさつた。社会組織が完全に変革されるためには、大衆自身がその変革にくわり、彼ら自身が、問題の本質はなにか、なんのために彼らは身体と生命とをかけて行動をおこすのかを、みずからすでに理解していなければならぬ。」(傍点筆者)。

このように、一八四八年の革命の失敗を契機としてそれ以後、社会主義運動は、いわばひとつの戦術的転換期に入った。ひとり革命のあとのもっとも生々しかったフランスやドイツおよびオーストリアだけでなく、イギリスにおいても、たとえば、チャーチスト運動の崩壊過程にみられるように、労働者階級を主力とする革命的な運動は、深刻な反省をせまられるに至つた。意識の高い少数者による革命、奇襲による社会組織の変革がきわめて困難であることがわかり、革命をなしとげるためには、大衆のひとりひとり意識が革命の意味を理解するほどまでにたかめられ、且つそれにくわむる必要があることが、重要不可欠の条件となつたとき、何よりもひろく、世界の労働者階級を糾合し、連帯の精神にもとづく国際的組織の結成によってその団結を強化し、且つおくれた大衆を啓蒙する

イギリスにおける社会民主主義の形成過程

必要性が強調されたことはいうまでもない。いわゆる第一インターナショナルは、その目的をもって建設されたものであり、このとき以来、マルクス主義者は、社会民主主義をもって、自己の思想を代弁させるようになったのである。

マルクス主義は、何故に社会民主主義のような一見、ブルジョア的な言葉をもって、その思想を代弁せしめなければならなかつたか。云いかえれば、一八四八年以前には、進歩的な知識人や革命的な労働者によって、あれほど力強く叫ばれた共産主義、共産党宣言や共産主義者同盟にみられたような共産主義の呼称は、その後何故に姿を消していったのであろうか。その秘密は、一八四八年の革命とその後における運動の推移そのものに伏在していたといえよう。

(一) 「共産党宣言」、一八七二年のドイツ語版序文、邦訳「マルクス・エンゲルス選集」(二)(大月書店、ポケット版、昭和三〇年)一四頁。

共産主義者同盟は、一八四八年の革命後、マルクスおよびエンゲルスによって、再組織されたが、セクト主義と左翼冒険主義の犠牲となり、一八五二年に分裂し解体した(W. Z. Foster: *History of the Three Internationals; The World Socialist and Communist Movements from 1848 to the Present*, 1955. 長洲一二、田島昌夫共訳三四頁)。

これにかんする最近の業績として、カール・オーベルマンの

みなかった社会民主主義という古い革袋に、新しい酒をもらねばならなかったのである。

いま、世界でもっとも早く社会民主党を名のつたドイツについてみるに、さきに少しく指摘したように、一八四八年のドイツ市民革命および反革命後、マルクスおよびエンゲルスらの共産主義者同盟を中心とする政治運動は後退し、とくにケルン共産党裁判などの陰謀事件などを通じて、弾圧が強化された結果、共産主義運動はほとんど影をひそめた。だが一八五〇年代におけるドイツ資本主義の発展は、ブルジョア階級とプロイセン絶対主義勢力との苟合妥協の上に、外見的立憲制によって下からの民主主義運動を緩和解消させようとした。しかし一八六〇年代におけるプロレタリアートの量的な増大と階級意識の昂まりを契機として、ドイツ社会民主党への道は、まずフェルディナンド・ラッサールによってひらかれた。すなわち一八六三年五月の「全ドイツ労働者協会」(Der Allgemeine Deutsche Arbeiterverein)の建設となってあらわれた。だが、ラッサールのプロイセン絶対主義的国家観崇拜の思想は、やがてビスマルクへ接近せしめる結果となり、この傾向は、後継者シュワイツァに至って、一層顕著なものとなった。一方、マルクス主義の立場に立つアウグスト・ベーベルとウィルヘルム・リーブクネヒトの指導のもとに、ラッサール主義に反対して、一八六九年社会民主労働党(Sozialdemokratische Arbeiter-partei)が組織され、アイゼナッハにおいて大会を開き綱領を定め、且つ第一インターナショナル

に加入したのであった。ラッサール主義とマルクス主義との理論的対立を象徴するこの両者は、下からの労働者階級の要求と、支配階級に抵抗するための戦線統一の必要上、一八七五年三月ゴータにおいて合同し、ドイツ社会民主労働党と称したのであったが、その綱領は、マルクスおよびエンゲルスの草案にたいする詳細にして克明な批判にもかかわらず、ラッサール主義の影響を強くうけたものであり、創立時におけるドイツ社会民主党の理論的な不徹底は、のちにやがて修正主義、日和見主義を育成し、一八九〇年代ドイツ資本主義の帝国主義的段階への移行にもなつて、いわゆる修正主義論争を惹起した基盤であった。いかえれば社会民主主義の理論そのものは、ドイツ社会民主党成立の経緯に徴して明らかのように、最初から折衷的妥協的性格、従って改良主義的日和見主義的傾向をまぬがれ得なかつたのであつて、その萌芽は、第二インターナショナルの崩壊によつて、その性格が暴露される以前に、すでにこの両派の合同の経過のうちに胚胎していたのである。ドイツにおける社会民主主義の形成過程が以上のようなものであれば、イギリスの社会民主主義は、どのような形成の仕方をとげたであろうか。

普通にイギリス社会民主主義といった場合、人はまず、労働党とそのイデオロギーを考えるのを常とする。イギリス労働党は、ドイツ社会民主主義とちがつて、マルクス主義のような特定のイデオロギーによつて、理論的に武装され且つそれを擁護すべく闘つてきたという歴史をもたなかつた。イギリス型社会民主主義の構造を把握す

るためには、やはり一九世紀にさかのぼつて、その形成過程を詳細に検討しなければならない。だが、ドイツ社会民主主義の形成とイギリス型社会民主主義の生成過程とを比較するとき、見逃すことのできない相違点は、資本主義発展段階の差異よりおこる必然的な結果のいちじるしい対照性と、その社会主義運動への反映のちがいであるといえよう。一九世紀の三〇年代にはすでに、産業革命を完了して、近代的なプロレタリアートが、ひとつの階級としての誕生を経験し、労働組合運動は、社会主義思想の影響をうけつつ、急速な発展をとげつつあったイギリスに比べて、ドイツはその革命的伝統と社会主義運動の輝かしい歴史にもかかわらず、近代的な工場プロレタリアートの階級的形成は、一八四八年の革命をまたなければならなかつたのみならず、労働組合運動の本格的な発展は、はるかに一八六〇年代以後のことであつた。より具体的にのべるならば、ドイツにおいては、マルクス主義という高度に錬磨された鋭利にして強靱な思想が、マルクスおよびエンゲルスによつてひとつのイデオロギーとして体系づけられ、それがウィルヘルム・リーブクネヒトやアウグスト・ベーベル、あるいはフランツ・メーリング等の指導者を通じて労働者大衆に働きかけ、労働組合の結成を促し更にその理論的武器となつたのに反し、イギリスにおいては、オーコンヤリカードウ派社会主義者もしくはスペンス主義者が出現する以前に、すでに労働組合はかなり長い歴史と牢固たる基盤を有していた。すなわち一九世紀初頭から中期にかけては、上部構造としてのイデオロ

イギリスにおける社会民主主義の形成過程

ギーと土台としての労働者階級の組織との関係において、イギリスとドイツとは、あたかも正反対のような現象を呈したのである。

イギリスⅡ空想的社会主義——鞏固な労働者の組織

ドイツⅡ科学的社会主義——未熟な労働者の組織

もちろんこのような簡単な定式化は、きわめて粗雑なものではあるが、労働運動の黎明期ともいうべき一九世紀初頭において、この両者に深く刻みこまれた痕跡は、その後の二つの社会民主主義の形成に根本的な相違をもたらしたのである。そのひとつはイデオロギーの問題であり、他は労働組合の演ずる役割の重要性の問題である。前者については、マルクス主義をとるかいなかであつて、問題は比較的明瞭であるが、後者は、この二つの社会民主主義の性格的な相違をあらわしている。

一体、労働組合をもつて、労働者の生活条件を改善するための必要な機関であるとみなしていた社会主義者は、その運動を政治的議会的運動と比較して第二次的なものともなし、労働組合をもつて社会主義政党的の指導に従うべきであるという支配的な見解をとつていた。労働組合にたいする社会主義政党的の支配と優越の原則は、資本主義発展のテンポがおそく、プロレタリアートの数が相対的に少なく、従つて労働組合の建設と発展とが、社会主義者による強力な指導と協力に負うていたヨーロッパ諸国とくにドイツにおいていちじるしく目立っていたが、これに比べるとイギリス労働党と労働組合との関係は、独特のものであり、従つてイギリス型社会民主主義の

特異性にもかかわるものであるといえる。すなわち、イギリスにおいては、社会主義政党としての労働党と労働組合とは、支配・被支配の関係にあったものではなく、むしろ逆に、労働組合の政策こそ労働党に反映したものであるといえることができる。

われわれはさきに、イギリス社会主義形成の支柱として、上部構造としての空想的社会主義（オーエン主義）、土台としての労働組合についてふれたが、もとよりイギリス社会民主主義の相貌は、それほど単純なものではなく、一九世紀前半から後半にかけてのイギリス資本主義の変容——「世界の工場」としての地位から広大な植民地を市場として領有する独占資本主義国への——の過程で、また政策形成の面では、自由放任主義からその終焉にいたるまでの間に、イギリス社会主義は社会民主主義に交差したのである。つきに、イギリスにおける社会主義の社会民主主義への成長の過程について、少しく考察するであろう。

(1) 大月版「マルクス・エンゲルス選集」第一巻「第一インターナショナル」一〇—一二頁。国際労働者協会創立宣言。

目 標	イデオロギー	思 想	指 導 者	団 体	大 衆
(一) 成年男子普通選挙権	社会主義	オーエン主義 リカードウ派社会主義	W・ラヴェット、H・ヘザリントン、ウインセント W・ラヴェット、B・オブライエン	ロンドン労働者協会	ロンドンの熟練工、小親方層、小商人

(2) 前掲書一〇—一二頁。
(3) Lewis L. Lowin; The International Labour Movement, History, Politics, Outlook, 1953, p. 24.
一八三八年頃からはじまり一八四〇年代に昂揚期をむかえ、五〇年代に至ってようやく沈滞していったチャーチスト運動は、イギリスにおける労働者階級の政治運動としては、もっとも大規模なものであったばかりでなく、世界において最初にして最大の大衆的革命運動ともいえるべきものであった。この運動が、どのような性格のものであり、労働者階級の運動の上に、いかなる歴史的意義をもつものであるか、われわれはいまこれについて多くを語るを必要としない。ただ、イギリス社会民主主義形成史という点から考察するとき、この大衆的運動の意義は、無視されるべきではなからう。われわれは読者の理解を助ける意味において、この運動の構造を左に表すであろう。

(一) 平等の選挙区	(二) 議員の毎年改選	(三) 議員資格の財産制限の撤去	(四) 無記名投票	(五) 議員の有給制	急進主義		
					ブルジョア急進主義	労働者階級の急進主義	
スペイン主義	フランス社会主義	マルクス主義	ブルジョア急進主義	労働者階級の急進主義	オブライエン	ロンドン民主協会	ロンドン周辺の広汎な低賃金労働者、失業者、手織工
					ハーニー	同胞民主協会	
					アーネスト・ジョーンズ、ハーニー	同盟民主協会	
					トーマス・アトウッド	パーミンガム政治同盟	パーミンガムの中小企業者労働者
					リチャード・コブデン、J・ブライト	反穀物法連盟	工業資本家、一部の熟練労働者
					オコンナー、フロスト	北方政治同盟 全国大憲章協会	手織工 北部工業地帯の工場労働者

表にも示されているように、この運動の目立った特徴として、それに参加した階級の、異常なまでに広汎にわたることであろう。とくに一八四〇年代以後から後期にかけて、産業資本家の利益を代表するブルジョア急進主義者の活躍——反穀物法連盟の運動に代表的にみられる——が活潑となる一方、一八四八年の革命の余波をうけて国際的な労働運動との関係が次第に密接となり、マルクス主義の影響をうけた指導者が、壊滅に瀕したチャーチスト運動の再建に努力しつつあったという事実は、何よりもこの運動の複雑性を物語るものであり、とりわけその十数年にわたる運動過程に、最右翼としてのブルジョア民主主義と、最左翼ともいえるべきマルクス主義の登場をみたことはまことに興味深い。一八五〇年代、衰滅しつつあったチャーチスト運動は、六〇年代にはまったく滅亡し、その廃墟に

イギリスにおける社会民主主義の形成過程

は、かつてのチャーチストの分解したそれぞれの流派が、産業革命の「苦悶と激動」から「ヴィクトリア黄金時代」への資本主義の変貌を背景に、そのヘゲモニーを獲得しようとしていた。この意味において、一八六四年、ロンドンにおける国際労働者協会、いわゆる第一インターナショナルの開催とこれにたいするイギリス労働者階級の反応は、まことに注目すべき事件であった。
一八六〇年代のイギリスは、いわゆるヴィクトリア黄金時代の最盛期であり、資本主義の躍進と希望の時期に相当した。この時期における諸変化のうち、もっとも注目すべきものは、労働組合運動の変貌である。合同機械工同盟を中心とする全国的職業別組合と、これを指導する「ジャンタ」と称せられる一握りの指導者は、労働組合をもって、労働力商品販売のためのもっとも有利な独占的機関

と考ふる経済主義にとられ、従って彼らのイデオロギーは、社会主義とはまったく無関係な政治的日和見主義におちいった。ウエック夫妻によれば、ジャンタの政策において、もっともユニークな従って巧妙な点は、労働組合の問題における極端な警戒心と政治的な改革を要求する精力的な運動との結合であった。エンゲルスも指摘しているように、資本主義の発展にともなう労働貴族層の形成は、労働者階級をしてオーエンの社会主義やチャーチストの精神を忘却せしめたが、労働組合主義者をして選挙権の獲得をまったく放棄させたわけではなかった。彼らは、チャーチストや社会主義とは別の方法によって、その目的を達しようとしたのである。もちろん彼らが、第一インターナショナルの運動に参加したことは、その政治にたいするなみなみならぬ関心を示すものではあったが、彼らはそれをもってプロレタリア国際主義の一環としての労働者政党组织しようとする意図を有するものではなかった。彼らはただ、政治的な闘争を、労働者階級が、その労働組合を、ブルジョアジー、議会および

が裁判所の干渉からまもることができるよう、選挙権の拡張のための闘いとみなしたのである。この闘争の結果が、一八六七年の第二次選挙法改正と、一八七一年の労働組合法の改正となって結果するのであるが、ブルジョア民主主義制度のなかで、労働者階級の経済的改善をなしうるとする当時の指導者の思想は、明らかにホイッグ・リベラリズムの浸透をうけた結果であり、このような考え方は、当時のブルジョアの政治的改進黨の結びつきにわかれは、イギリス社会民主主義の萌芽をみる事ができるのである。一九世紀初頭から後半にかけてのイギリスにおいて、上部構造としてのイデオロギーと土台としての労働者階級の運動との関係の推移が、いかに行なわれたか、たとえばオーエン主義とチャーチストとマルクス主義と労働組合主義のようにその鮮やかな変化は、イギリス資本主義の変貌を忠実に反映するものでありイギリス社会民主主義形成のためのひとつの道標としてみるならば、まことに興味深いものがある。

年 代	イデオロギー	労働者の運動	権 利 の 獲 得
一八二〇—三〇	オーエン主義	グラント・ナンショナルの運動	団結禁止法撤廃、第一次選挙法改正
一八三〇—一八五〇	リカードウ派社会主義 労働者階級急進主義 中産階級社会主義 フランソア主義	チャーチスト運動	十時間法の獲得 穀物法の廃止

一八五〇—一七〇	労働組合主義 ホイッグ・リベラリズム マルクス主義	全国的職業別組合運動 第一インターナショナル	第二次選挙法改正
一八七〇—一八〇	新 急 進 主 義	労働代表の出現	一八七一年の労働組合法の成立

この表から明らかなように、一八五〇年代、イギリス資本主義の黄金時代への移行にともなって、チャーチスト運動終焉以後の労働者階級の運動は、ブルジョア急進主義の代弁者としてのホイッグ・リベラル(自由党左派)によってひきいられた普通選挙権獲得のための運動と、マルクス主義の影響をうけたアーネスト・ジョーンズやジュリアン・ハニー等のチャーチスト派の運動の左右両派に分裂した。一八六〇年代に至って、これら二つの運動の流れは、左派は第一インターナショナルを、右派はブルジョアの政治改進黨運動の諸流派を出現せしめたが、一八七〇年代になると、マルクス主義はほとんど忘れ去られて右派が勝利をしめ、ホイッグ・リベラリズムと労働組合主義との妥協ともいべき新急進主義をイデオロギーとする労働代表の議員が選出されるようになった。いわゆる「自由労働」(Lib-Labs)の時代がはじまったのである。マルクス主義が、この時期に大きな力となりえなかったのは、ひとえに労働組合を把握することができなかった点にあった。労働者階級がみずからその政党组织することなく、むしろ労働組合の代表的指導者を労働者階級の代表として、みずから敵対者であるべき自由党の一

イギリスにおける社会民主主義の形成過程

員としておくり出したという事実は、海外からの老大な超過利潤によって労働者階級の上層部(労働貴族)が買収され、それによって労働の対立が緩和されたような現象を現出したことと照応するものであり、また、このことを前提にして、イギリス社会民主主義形成史の第一頁を書かなければならないところに、この国の社会民主主義の大きな矛盾があり、ドイツ社会民主党などと異なる独特な点が見られよう。すなわち、自由党の議員を指導者としていたく労働組合は、正しくブルジョア政党组织としての自由党の下僕たるの地位に甘んじなければならなかったのであって、将来、労働者階級が、真にその利益を代表する社会主義政党组织しようとするならば、断然ブルジョア政党组织との従属関係を絶ってこれを侵蝕し、その勢力をうばうことは逆にそれと妥協しながらこれを侵蝕し、その勢力をうばうことによって自由主義を改宗せしめるか、そのいずれかを選ばなければならなかった。前者はドイツ社会民主党のとった態度であり、後者はイギリス労働党が選んだ途であった。第一インターナショナルを中心とする左翼的な国際社会主義運動の圧力と、ブルジョア急進主義者とジャンタを中心とする労働組合

主義者との協力的体制を基礎とした政治改革運動の要求によって、さらにまた、一八三二年の選挙法改正以来、急速にその政治的基礎を脅かされつつあった保守党が、次第にその勢力を伸張しつつあった労働組合を、自由党の側に追いやることに極度の不安を感じつつあったという事実によって、一八六七年、「トリー・デモクラット」デイスレーリーは、貴族的支配階級の立場から労働者階級にたいし、恩恵として第二次選挙法改正を行なった。これは、一八三二年の第一次選挙法改正と一八八四年の第三次選挙法改正に対応するものであり、都市の労働者にたいして大きく政治への途を開いたものであった。いまや自由保守二大政党は、たかまりつつある労働者階級の要求を満足させなければ、彼らの政治的地位を維持することが困難となり、イギリス自由主義は、たんに大衆の力の前に恐怖するばかりでなく、これに向って真剣に対処する方法を案出しなければならなかった。かくして一八七〇年代のイギリス労働者階級は、キャスティング・ヴォートを握るべき立場におかれたのであった。

一八六七年の選挙法改正と労働組合の法的地位の危機とは、労働組合指導者をして政治に対する強烈な関心をよびおこし、一八七四年の選挙において、炭坑夫全国組合 (The National Union of Miners) の役員トーマス・バート (Thomas Burt) およびアレキサンダー・マクドナルド (Alexander MacDonald) の二人が下院議員に当選した。労働議員選出連盟 (The Labour Representation League) は立候補者を自由党に公認させることに努力し、

から昂まりつつあった新組合運動と相まって、自由党の下僕たるの地位を脱却し、自由労働政策から社会主義の方向へ進むとする「独立労働」の気運が澎湃としておこるに至った。すなわち一八九三年、ハーディを議長とする会議において独立労働党 (The Independent Labour Party) が結成され、やがて一九〇〇年、労働組合および社会主義団体 (フェビアン協会、独立労働党、社会民主連盟、社会主義者同盟) の代表者から成る労働代表委員会が結成され、これが一九〇六年の総選挙において、委員会を代表する議員は二九名、坑夫選出の議員が四名、自由労働グループが一名、計五四名となつて、労働陣営は一大勢力となり、イギリス労働党と改称するに至った。われわれはさしあたり、イギリス社会民主主義の分析という視点から、一八七〇年代から八〇年代にかけてのその生成期における労働組合運動と自由党との関係を追求することによって、イギリス型社会民主主義の特殊な性格を浮き彫りにしてみたいと思う。

さきにも述べたように、イギリス社会民主主義の特異性は、労働組合によって労働者党としての労働党が支配され、後者はただ前者の政策を反映するものとして成立したという事実のなかに見出された。ドイツ社会民主党のように、一八四八年の革命前後から活潑な運動をつづけていた社会変革を目的とするマルクス主義団体の革命的伝統の上に、明らかに社会主義政党として建設されたのとは異なり、一八七〇年代の労働代表議員は自由党の資本家的イデオロギ

イギリスにおける社会民主主義の形成過程

ジョン・スチュアート・ミルのような、自由党員の支持によって、自由党に所属することができた労働者代表は、いわゆる自由労働政策の担い手として自由党員としての議席を下院において占め、一八八〇年の選挙にはもうひとり、ヘンリー・ブロードハースト (Henry Broadhurst) が加わった。この当時の労働者代表議員選出の運動は、独自の労働者階級の政党を結成するという積極的な意図も要求ももっていなかったことは明らかで、労働組合指導者としてのジャンタは、この運動を労働法規改悪反対のための圧力として利用する一方、これはまた、チャールズ・ディルク (Charles Dilke) とジョセフ・チェンバレン (Joseph Chamberlain) の影響のもとに向っていた自由党左派のたんなる補助機関となつたのである。

一八八〇年に、バート、マクドナルドおよびブロードハースト等三名の労働者代表が、自由党の議席をしめていたが、一八八五年には新たにエイブラハム (W. Abraham) シュセフ・アーチ (Joseph Arch) クローフォード (W. Crawford) クリーパー (W. R. Cramer) フェンウィック (G. Fenwick) ハウエル (G. Howell) リースター (J. Leicester) ヴッカード (B. Pickard) ウィルソン (J. Wilson) 等の新しい議員が加わり、マクドナルドは一八八一年に死去したため、労働代表の自由党議員は、総勢二一名となった。そして一八九二年の総選挙においては、新たにジョン・バーンズ (John Burns) ヤター・ハーディ (Keir Hardie) 等の社会主義を唱える議員を当選させて、一五名となった結果、折

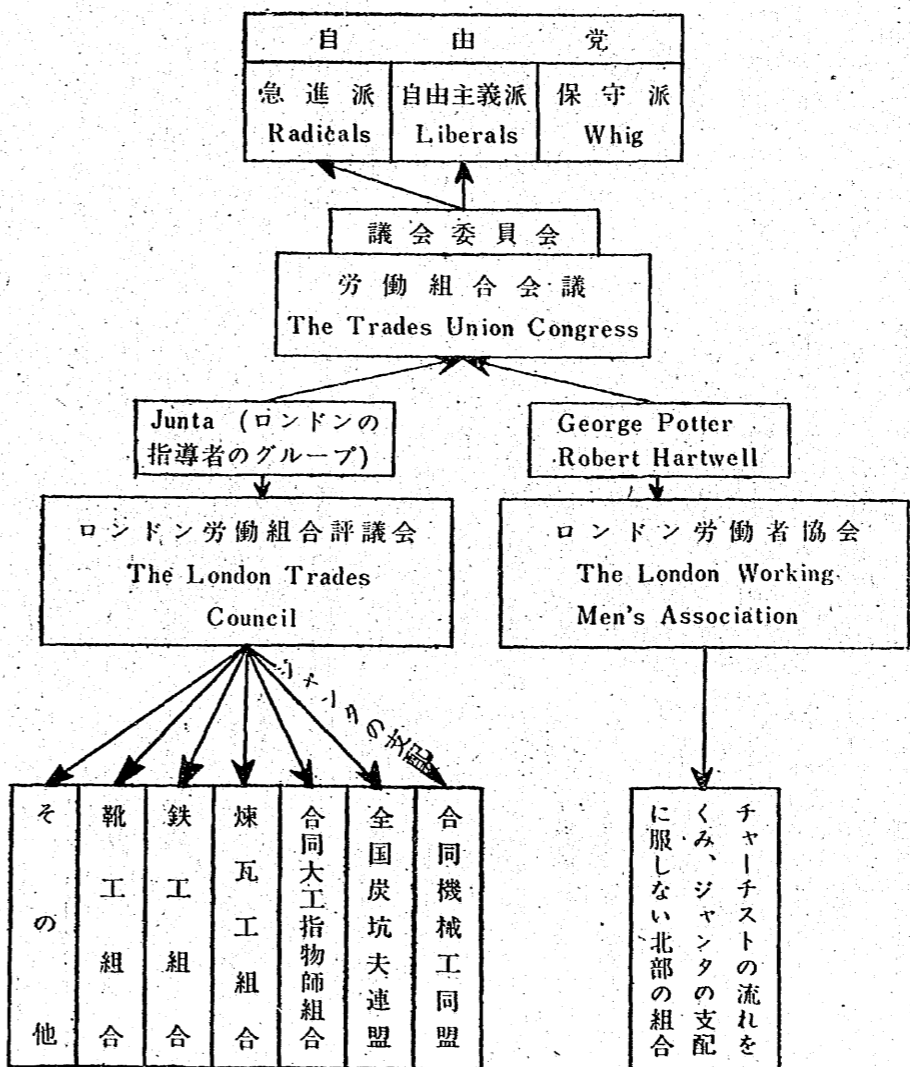
りに深く浸潤され、社会主義政党の結成などはまったく夢想たにもしなかつたニュー・モデルの組合 (排他的・労働貴族的な熟練労働者の組合) の代表であった。しばしば指摘されるように、イギリスの労働組合は職業別に組織されている熟練工中心の組合であるため、一八五〇年代から六〇年代にかけて炭坑、綿業、機械産業、建築業などの各職種に、全国的な職業別組合が成長していたにもかかわらず、それぞれの職業別組合の間に緊密な連絡がほとんどなかった。ところが、一八五〇年代、建築工の九時間労働制獲得のげしい闘争の過程において、彼らは合同機械工同盟の援助をうけ、その要求は貫徹できなかったけれども、その結果として一八六〇年合同大工および指物師組合 (The Amalgamated Society of Carpenters and Joiners) とロンドン労働組合評議会 (The London Trades Council) の建設をみたことは、労働組合運動史上、きわめて重要な意義をもつていた。

ロンドン労働組合評議会は、「議会の内外において、政治的社会的に、労働者階級の一般的な利益について監視する」という規約を採択したが、その建設に大いに尽力したロバート・アップルガース (Robert Applegarth) およびウィリアム・フラン (William Allan) を中心に、ジョージ・ハウエル (George Howell) エドウィン・クルソン (Edwin Coulsen) ジョージ・オッシュャー (George Odger) およびダニエル・ガイル (Daniel Guile) などの各指導者が集まって、ここに自然に、労働組合の参謀本部として

ジャンタが成立した。そしてその後における主従法撤廃および第二次選挙法改正の闘争をへて、やがてこの労働組合評議会の原則の全国的な規模への適用としての労働組合会議(Trades Union Congress)が一八六八年に成立したのである。

しかし労働組合運動の「参謀本部」ともいべきこの労働組合会議は、ロンドン労働組合評議会を支配していたジャンタによってつくられたものではなく、むしろニュー・モデルの労資協調主義の上に立つジャンタとジョージ・ポッターの指導の下にジャンタの支配に屈せず「ザ・ビーハイヴ」紙による北部の戦闘的な労働組合のグループとの対立の結果生まれたのであった。だが、労働組合会議の活動のひとつの重要な側面は、議会委員会(Parliamentary Committee)の設立であって、これは、本来、ロンドン労働組合評議会と協力して、労働組合関係法案の議会通過を監視したり、必要とあらば別の労働組合会議を開くことを要求する権限があたえられていた。また労働組合員を議員に当選させるための自由党の連絡機関でもあったので、ジャンタを中心とする労働組合指導者と自由党との

関係が離れがたく結びついた一八七五年から、社会主義者が労働組合運動に登場し、新組合運動の怒濤が、「自由労働」政策をけしく揺がすようになるまでの十年間、労働組合会議の議会委員会



は、あたかも自由党の院外団のような観を呈したのであった。一八七四年、バートとマクドナルドが自由党員として下院議員に当選したのは、以上のような労働組合と自由党との関係を前提としたものであった。つぎに一八七〇年代から八〇年代にかけての「自由労働」政策の時期における労働組合と自由党との関係を表示してみよう(前頁を参照)。

一八七〇年代から八〇年代にかけてのイギリスの労働組合は、その代表者を議会におくるにあたって、独立の労働者政党の建設を意図することなく、自由党と妥協し、その一員として、ブルジョア的自由主義的思想の強い影響のもとに、むしろこれを利用して、みずから社会民主主義を実現しつつあったという事実は、その特異な性格として強調されなければならない。イギリス社会民主主義の根幹をなすベンサム・ミルの思想や労働組合主義は、すでにこのときに発するものであり、一八八〇年代から九〇年代の終りにかけて、新組合主義の運動や社会主義運動が盛んになり、フェビアン主義やマルクス主義が労働者階級の運動に大きな影響をあたえるようになる以前に、すでにイギリス社会民主主義の基本的な構造は、形づくられていたとすることができるのではないだろうか。いうまでもなく、社会民主主義政党としてのイギリス労働党の成立は、二〇世紀の初頭、かのボア戦争の帝国主義的興奮のなかにおこなわれたカーキー選挙を契機として発足し、一九〇六年、労働代表委員会を労働党と改称したことに由来するものであった。従って、自由労働政策の

破綻が新組合運動の勃興、社会主義運動の昂揚(社会民主連盟、フェビアン協会、社会主義者同盟)によって促進され、熟練労働者の組合運動の排他的独占的性格への非難が急速にたかまったとき、このようなイギリス資本主義の独占段階への突入によってつくり出された新状況に適応するため、内部からこれに因應することによって、労働組合運動の危機を打開しようとする「独立労働」の運動がその誕生をみたことは決して偶然ではない。イギリス労働党は一八九〇年代における「独立労働」の運動を土台とし、フェビアン主義の改良主義と社会民主連盟のマルクス主義とのイデオロギー的相剋を上部構造とする苦悶のなかから、徐々に姿をあらわしたものである。(未完)

(1) 拙稿「十九世紀後半におけるイギリス資本主義の変貌と労働組合運動の変転」(その一)(三田学会雑誌第五一卷第四号)参照。

(2) Webb: History of Trade Unionism, 1920, p. 240.

(3) エンゲルス「イギリスにおける労働者階級の状態」の一八九二年版序文。大月版「マルクス・エンゲルス選集」補巻二(昭和三十一年)五〇〇頁。

(4) この当時、インターナショナルの英国人の会員は二五、七三人であったといわれる(G. M. Stekloff: History of the First International, 1928, pp. 385-386.)

(5) Stekloff; *ibid.*, p. 61.
 (6) 三田幸金雑誌第五一巻第九号、第五二巻第三号の拙稿参照。
 (7) G. D. H. Cole; *British Working Class Politics*, 1832-1914, 1950, p. 77.
 (8) 中村英勝著「イギリス議会史」(有斐閣、昭和三四年)一五一頁。
 (9) 石上良平「英国社会思想史研究」(創文社、昭和三四年)三一六頁。
 (10) G. D. H. Cole; *A Short History of the British Working Class Movement*, 1931. コール「イギリス労働運動史」(Ⅰ)林健太郎邦訳(岩波現代叢書)二二九頁。

(11) コール、前掲書二二六頁。
 (12) A. W. Humphrey; *A History of Labour Representation*, 1912, p. 72.
 (13) B. C. Roberts; *Trades Union Congress*, 1958, pp. 14-15.
 (14) A. L. Morton and G. Tate; *The British Labour Movement*, 1956, pp. 123-124.
 (15) Roberts; *ibid.*, p. 65.
 (16) Morton and Tate; *ibid.*, p. 124.
 (17) Webb; *ibid.*, pp. 362-363.

一八九一—三年のプロイセン税制改革

— 帝国主義形成期におけるドイツの財政政策(2) —

大 島 通 義

一八七一年に統一されたドイツ帝国においてプロイセンは最大・最強の邦国であった。ラインラント、ヴェストファーレンおよびシユレージエンに生成した大工業資本は、エルベ以東のユニカーと共に、プロイセンの支配者であったのみでなく、ドイツ全体をも支配するものであった。その生産物はプロイセン全体の大半を占めたのみでなく、ドイツ全体においても決定的な役割を演じた。⁽¹⁾ 財政面ではライヒ歳入中の約六割がプロイセンを通じて調達されていた。⁽²⁾ 政治や行政の面でもこの点は同じであった。⁽³⁾ このようなことから、ドイツにおける帝国主義形成の過程でのプロイセンの位置や役割がまさに決定的なおもみを持つものであったことは、容易に察しうるであろう。この小論では、そのプロイセンの財政構造を明らかにし、ことに、九〇年代の初め、ビスマルクの退陣と時を同じうして着手されたミクエルの税制改革の内容を分析して、これが、その後急速に帝国主義的発展をとげるドイツ資本主義、そのもとでのプロイセンおよびライヒの財政をどのようなしかなしたで基礎づける

ものであったかを解明しようとするものである。その主な項目は次のとおりである。

- (Ⅰ) 八〇年代の財政状態
- (Ⅱ) 所得税の改革と邦財政
 - (1) 経過と内容
 - (2) その役割
- (Ⅲ) 収益税の改革とその地方自治体への移管
- (Ⅳ) 八〇年代の財政状態

一八七九年のライヒの関税および財政改革は、「新ドイツ帝国の歴史における最大の内政史上の事件」としてライヒの財政政策の明確な一転換点をなすものであったが、これからわれわれが取上げようとするプロイセンの財政に対しても大きな影響を持つものであった。この改革は、ライヒの側では、「穀物と鉄」に象徴される諸商品の関税を引上げて保護主義への転換をはかると共に、間接税の増